

## 6 それぞれの所感（向段の場合）

### (1) はじめに

奄美高校赴任5年目、ようやくこの研修に参加することとなった。奄美大島に来て以来、ずっとこの美しい海に魅了され、シュノーケリングやSUP、シーカヤックにウェイクボード、そしてスキューバダイビング等々、マリンスポーツにどっぷりつかってきたが、なぜかキャンプはしていなかった。来島してすぐに道具は揃えていたのに、だ。しかし今年ようやくそのチャンスがおとずれ、11月に入ると毎日何度も天気予報を見ては、持参する道具についてあれこれ考える日々が続いた。この研修は我々人間の都合だけでは実行できない。変わりやすい島の天気と波の影響が関係してくる。今年は無人島に行ける最後のチャンスなので、「船が出るときに絶対行くぞ」という意気込みで準備に取りかかった。とはいえ、準備といっても基本的な装備は揃えてあるので、「できるだけ身軽に必要な最小限でかつ楽しめるキャンプにするためには」という、取捨選択を考えるのが主な準備なのである。天気とにらめっこしながら、無人島で過ごす24時間をシミュレーションする日々が続いた。

### (2) 出発

11月20日、快晴、いよいよ出発の日がやってきた。最後まで持って行くアイテムで迷っていたものが3点あった。スリーピングマット、クーラーボックス、ギター。スリーピングマットは折りたたみできる軽量なものか、大きくても寝心地のよいものか、どちらか1つ。クーラーボックスは他のメンバーがどのくらい持ってくるか分からなかったので、取りあえず持参して集合してから決めようと考えた。ギターはもちろんキャンプ道具ではないが、無人島で太平洋を眺めながらのんびりと奏でられたら最高じゃないかと夢想しながら、でも必需品ではないからなあ・・・と最後まで悩んでいた。

8時30分、学校に集合し、みんなの荷物を確認。前村氏は釣道具、大谷氏は銚子、大冨氏はみんなのためのバーベキューセットやSUP、その他もろもろ、結構な量のアイテムをそれぞれが持参していたため、私も迷っていた3つのアイテムを全て持参することにした。もちろんスリーピングマットは、寝心地優先で大きいものに決定。はじめは大谷氏のトヨタカローラ号での移動予定であったが、荷物が載り切らず、急遽、私のニッサンプレサージュ号へ変更になった。一応8人乗りの2,500ccの車だが、なんと満杯。かろうじて4人全員が乗り込み出発となった。十数年にわたる長距離通勤で走行距離約29万キロの愛車だが、最近足回りの調子も悪くて少し心配だった。しかし、これも研修のうち、何かトラブルがあっても思い出に残る経験になるかもしれないし、愛車の最後のミッションかもしれないということで頑張ってもらったことにした。



### (3) 出港

古仁屋港に到着。さっそく食材の買い出しにAコープへ。食材は現地調達も予定しているが、何と言ってもアルコールと肉はここで買うしかないの、4人分の食料をゲット。今回は若者もいないので(?), あまり大した量は必要なかった。メインは鹿児島黒牛の霜降りカルビだ。量より質、おいしい肉を少しで満足の中年バーベキューコースである。

古仁屋港をようやく出港し、フルサト浜へ。じつは当初の計画では請島沖にある木山島を目指す予定だったが、軽石の影響で船が着岸できないとのこと⑩。そこで船長から俵小島を紹介されていたので、途中、そこへ寄ってどんな島なのかを見学した。俵小島は、古仁屋港からも見える加計呂麻島からの陸繋島である。近い。近すぎる。無人島の木山島へ思いを馳せていたので、近すぎる俵小島では無人島感が全くないので、即却下であった。そこで加計呂麻島の芝港近くのフルサト浜へ行くことになった。船でしか到達できない、いわゆる無人浜のフルサト浜だが、到着すると幸い軽石の影響はほとんどなく、美しく青い海が広がっていた。

⑩ 2021年8月小笠原諸島の海底火山が噴火し、太平洋沿岸に大量の軽石が漂流し漂着していた。



#### (4) フルサト浜

到着した我々はさっそく浜辺を探索。浜の長さはだいたい 300～350mくらいだろうか。テントを構える場所を決めるために探索しながら、夜のバーベキューのための薪となるものを集めていった。集め始めてから気がついたのだが、あまり薪になるような木材がない。美しい浜辺だと思っていたが、薪がないとなると夕食に関わるので大変だ。みんなでより注意深く探索し、薪を集めていった。ようやく一晩分くらいの薪を集めたが、湿っている木材は日に当てて少しでも乾燥させつつ、持ってきた鋸で1mくらいに切断していった。私が薪の切断をしているとき、前村氏は釣り、大谷氏は貝採集、大富氏はバーベキュー用の足場を固めており、それぞれ話し合ったわけでもなく自然と役割分担ができていた。着々と準備を進め、作業が一段落したところで、昼食をとる。私は持参したインスタントラーメンかパスタかのどちらにするか迷ったが、夜の肉に備えて軽いラーメンにした。



#### (5) ギター

昼食後は自由時間。バーベキューの準備は16時からスタートすることを決めたあと、それぞれ無人浜で2時間あまり別行動である。私はテントで寝転がり、読みかけの文庫本を手にした。テントは波打ち際に張ったので、大島海峡の穏やかな波のせせらぎを聞きながらの読書である。天候も最高に良く、暑くもなく寒くもなく、そよぐ風が気持ちいい、この上ない最高のコンディションである。次



第に眠気が襲ってきてウトウトとしはじめるのも、これまた最高に心地よいひとときである。しかし本格的に昼寝してはもったいない。無人浜での24時間は大変貴重だ。しかも奄美でのキャンプはもう最後かもしれない。ということで、意を決して持参したギターを取り出して奏でてみることにした。今回持参したギターは4年前に購入したYAMAHAのCS40J、ショートスケールのクラシックギターである。普段は自宅でTVを見ながら適当に爪弾くギターだが、いざ浜辺で何を弾くかとなると、全然考えてこなかったのが迷ってしまった。適当にスリーコードのブルースを弾いてみる。うーん、真昼の浜辺では全く雰囲気が違う。今度は1625(I-VI-II-V)の循環コード進行でジャズフレーズを弾いてみる。なんかしっくり来ないが、それはたぶん実力不足のせいだ。あまりジャズフレーズの引き出しは多くないので、残念ながら20分くらいで飽きてしまった。なにか没頭できる曲を数曲練習しておけば良かった…。秋にぴったりの曲は何だろうか。そうだ！ジャズスタンダードの名曲『枯れ葉(Autumn Leaves)』だ！ジャズ初心者には定番の曲。これなら弾ける。しかし…、ちょっと弾いてはみたもののテントの横には瑞々しいアダンの木が生えている。そもそも亜熱帯の奄美群島に枯れ葉はない。いくら11月下旬の秋とはいえ、まだ海に入ることができるこの島では、まったく秋の気配はなく、残念ながらこの曲もこの雰囲気には合わなかった。そうだ、もし次があったらボサノヴァを弾こう。南国らしい陽気なボサノヴァを次回までの練習課題に決め、その後あれこれ適当にバチーダ奏法を用いてそれらしい雰囲気で爪弾いたあと、昼寝した。



## (6) 宴

目が覚めるとちょうど16時、ゴソゴソとテントから這い出し、バーベキューの準備に取りかかる。どことなくみんなも集合し、それぞれの仕込みに取りかかった。大富氏は火を起こし、前村氏は釣った魚を捌く。大谷氏も採集した貝を手にとってきた。私は鶏肉をカットし、焼き肉奉行として肉の声を聞く係になった。だんだん日も暮れてきて、いよいよ宴の始まりだ。コロナ禍の中、絶妙なタイミングで訪れた絶好の機会に乾杯し、奄美の自然に感謝しながらの晚餐が始まった。沈みゆく夕日を眺めながら、このキャンプのすばらしさを語り合いつつ肉と酒を楽しむ。これ以上ない最高の時間だ。Aコープで購入した食材をバーベキューの網に置いていく。まずは「健康一番とり」。JAで孵化から肥育販売までしている、臭みのない美味しい鶏肉だ。さつま赤鶏とはまた違う、あっさりとしているが肉の味わいがしっかりと感じられる鶏肉である。これを大自然のバーベキューで食べるのだからおいしさ倍増。ハッキリ言っておじさん達には、これでもう十分だった。もちろん野菜も食べつつ、鹿児島黒牛のカルビ、Aコープの「茶味豚」のバラ肉などを少しずつ黒糖焼酎のペース



に合わせて炙り、鹿児島県の畜産関係者に感謝しながら堪能した。途中、前村氏の釣った魚と大谷氏の採集した貝類（詳しくは前村氏、大谷氏の原稿でご確認ください）を肴に、宴は大いに盛り上がった。夜も更け、お腹も満たされたところで、ほどよくいい気分になってきたら、やはり唄を歌いたくなってきた。ギターの出番です。コロナ禍だがここは無人浜。幸い緊急事態宣言もまん延防止等の適用もない。しかも同じ職場で仕事をしている仲間たちである。カラオケボックスのような密室でもなく、大自然の屋外で、互いに1.5m程度の距離を保ちつつ（3密は回避して）交代で数曲熱唱することができた。無人浜ではあるが、ここはスマホの電波が入るところだったので、歌詞や楽譜を検索して、それを見ながら伴奏あるいは歌唱ができる。覚えていなくてもキャンプのもとで歌えるなんて。ITの恩恵をこんなところでも受けたのであった。



## (7) 2日目

宴のあと、みんな心地よく眠りにつき、一度も途中で起きることなく、翌朝波の音で目を覚ました。鳥の鳴き声で目覚めるのも良さそうだが、今回のキャンプでは本当の波打ち際にテントを張ったので、その音で目覚めたのである。前村氏は波の音が近すぎて、水没するのではないかと、夜中に目覚めたらしい。そんな前村氏は早朝から釣りである。さすが釣りの名人。このあと35cmの大物が釣れるのである。昨夜の余韻に浸りながらまったりと過ごし、モーニングコーヒーを淹れる。朝食を準備しようとしていたら大富氏がホットサンドを焼いてくれるという。なんと贅沢なことか。感激である。ツナとカマンベールチーズたっぷりの熱々出来たてホットサンドを頬張りながら、穏やかな朝を過ごした。お腹も満たされたところで、さて午前中をどう過ごそうかと考えていたところ、あまりにも天気がよく心地よかったので、大富氏持参のSUPを借りて海へ出ることにした。とはいえ、ずぶ濡れにはなりたくなかったので、あまり無茶はせず、慎重に漕いで周辺の海中に目を向けた。しかし目に見えるところにはほとんど魚は見えず、珊瑚の鑑賞に終わった。釣り糸を垂らしている前村氏には気の毒だが、魚たちはどこかへ行ったようである。



のんびり過ごしたあと、ようやく帰りの船の時間となった。その間ずっと海を眺めていたが、海流によって小笠原諸島から漂流している軽石が行ったり来たりしている様子がよく分かった。船中、船長の話によると、軽石はどこに流れるか予想がつかないようで、今回のキャンプ地の選択もいくつか考えていたようである。他の船の船長さんたちと情報交換しながら、今回はフルサト浜を案内してくださったそうだ。なにはともあれ、大きなトラブルもなく、ただただ平和でのんびりと楽しいキャンプができたことに感謝しながら古仁屋港へと帰っていった。



#### (8) 最後に

今回、念願の無人浜キャンプに参加できて感無量である。本当は無人島がよかったのだが、コロナ禍で緊急事態宣言が解除されたこのタイミングでは、キャンプができただけでも奇跡的なことかもしれない。日頃蓄積されたストレスを一気に解放したような感じである。奄美に来て自然のすばらしさを体感し、自然と一体化するような経験を何度もすることで、自分の中の言葉では表現できない様々な化学変化を味わったような気がしている。蓄積された悪い気をアースするというか、地球に吸い取ってもらい、本来のヒト科の動物に戻るといのような、そんな気分だ。奄美でのキャンプはこれが最後かもしれないが、鹿児島もまだまだ広いので、また新たなキャンプ地を探して挑戦したいと思う。



高知山展望台から遠くに見えるフルサト浜方面  
(手前には大きなヒカゲヘゴが見える)